

解 答

□

問一 a 宣伝 b 体系 c 事例 d 拡散

問二 ある学説や事実がなぜ正しいのかを根拠や理由をあげて説明し、人々を説得できてはじめて「知っている」と言えるのであり、それができないのならば「信じている」にすぎない。

問三 観察

問四 説得力

問五 「あなた」が「知っている」という酸素説によって、燃素説を「信じている」十八世紀の科学者を説得することも、彼らの反論をくつがえすこともできないから。

問六 わたしはグラスの中の酸素がすべて燃焼したからロウソクの火が消えたことを知っている

問七 権威のある人が言ったから、権威のある本に書いてあったからという理由で「信じて」しまい、なぜそれが正しいのか説明したり説得したりできるまで「知ろう」としないような人。

□

問一 a 済 b 額 c 招

問二 ① エ ⑥ ウ

問三 ② イ ③ イ

問四 私が、初めて見る蟬の羽化に心を奪われ真剣に見入っていること。

問五 A 子どもは、自分自身の力でふさわしい時に成長し、大人になっていくものであり、その過程でたとえ悪戦苦闘していても、親はただ見守ることしかできない〔ということ。〕

（親にできることは本当は何もない）

B [その時、親は] 喜びとさびしさ〔を感じるということ。〕

問六 嫌いなトマトを頑張って食べることで、父を喜ばそうとした自分の心の中を父に見ぬかれたように感じたから。

解 説

□ 出典は、中川敏『言語ゲームが世界を創る』。

問二 「信念」「信仰」は「信じている」、「知識」は「知っている」ということ。「信じている」と「知っている」ということについて、どのように説明しているかをおさえるようにする。「地球が太陽の周りをまわっている」ということと「ロウソクの火が消えるのは酸素がなくなったからだ」ということを例にあげて、「なぜ、それらの答が正しいのかを説明できるだろうか」「地動説が正しいことを説得することができるでしょうか」「燃素を信じる十八世紀の科学者に酸素説を説得することができますか?」と問い合わせ、そして「あなたは天動説を信じている人に地動説を納得させることもできなければ、十八世紀の科学者に酸素説を納得させることもできません。あなたはこれらの答を『知っている』のではないのです。単に『信じている』だけなのです」と述べていることを手がかりに、「知っている」というためにはどんなことが必要かということを書き、それができなければ「信じている」にすぎないのだということを書く形でまとめるようとする。

問三 「宇宙の動かない点に彼らを案内して」が、前段落の「太陽と地球の見渡せる不動の場所に行って」ということを言い換えたものであることをおさえる。そのような場所に行って、地球が太陽の周りをまわっているのを「見る」こととは、つまり「観察によって地動説の正しさを直接に知る」ということ。

問四 考えの異なる相手を言い負かして、自分の考えの正しさを認めさせるものは、「説得力」。

問五 「説得力」とは、自分と異なる考え方の相手に自分の考えを納得させ、相手に反論があればそれを打ち破り、相手を説得する力のこと。「あなた」が燃素説を聞いても納得し、説得されることがないのと同じように、ロウソクの火が消えたのは酸素がなくなったからだ、と言っただけでは燃素説を信じる十八世紀の科学者は納得しないし、説得されることはなく、逆に反論してくるであろう。そのように、酸素説が燃素説を信じる人の反論を打ち破り、説得することができなければ、どちらも同じ程度の説得力だ(=説得力はない)というのである。

問六 空欄をふくむ文が、「最初の問題を考えてみましょう」と、地動説と天動説について述べている部分の末尾の、「あなたには『彼らは……わたしは地球が太陽の周りをまわっていることを知っている』と言う資格はないのです。」という文に対応していることをおさえ、「地球が太陽の周りをまわっている」を「第二問」の話題である「グラスの中の酸素がすべて燃焼したため」「ロウソクの火が消えた」に置き換えてまとめる。

問七 ここで「未開人」と、未開人に「 」が付けられているのは、本当の意味での未開人のことではなく、教会の言うことを鵜呑みにして、自分で説明できるまで自分の頭で考えようとしなかった昔の人のことを指している

からです。昔の人が天動説を信じたのは、ありがたい聖書に神の言葉としてそう書いてあり、権威ある教会がそう言ったからです。天動説を信じる人に自分の言葉で地動説の正しさを説明し、納得させることができず、ただ「学校の先生がそう言ったから」「教科書にそう書いてあったから」という理由で、地動説を「信じている」人は、結局聖書や教会の言うがままに天動説を信じた昔の人(=「未開人」)とどこも違わないというのである。

〔二〕 出典は、森山友香子『蟬とトマトと父の思い出』。

問二 ①「ひどくつかれて、口を開けるのもおっくうだ。」のように用い、「めんどうで、何もやりたくない気持ちであること」を表す言葉。 ⑥「無性に腹立たしい。」のように用い、「おさえることができないほど。どうしようもなく。むやみに」という意の語。

問三 ② 母の言葉は、父さんが呼んでいるので、返事をして早く来なさい、夏休みの宿題はちゃんとやっているか、と子どもの「私」を「叱る言葉」なので、「小言」が入る。 ③ 「私」が蟬の羽化にじっと見入って、身じろぎもできなくなっている状態。くぎで打ち付けたようにぴくりとも動かなくなるのが「くぎ付けになる」。

問四 少し前に「蟬の羽化に□になっている私を満足そうにながめながら」とあるのに着目し、「私」が蟬の羽化にどうなっていることに満足しているのか読み取るようにする。さらに前の段落に、「私は、まばたきもおしむような気持ちで、蟬の羽化に立ち会った」とあるが、「まばたきもおしむような気持ち」とは、蟬の羽化の神秘的な美しさに心を奪われ、じっと見入っている様子である。父が蟬の羽化を見せたくて庭から「私」を呼んだのだから、「私」がそのように夢中になって蟬の羽化に見入っているのは、父にとって当然「満足」することである。

問五 A 蟬の羽化を、人間の子どもの成長にあてはめるとどういうことになるか、ということを考える。「蟬は自分で羽化する時ば知って、自分の力で殻ば破る」とは、子どもは自分自身の力で成長し、大人になっていく、ということ。その時「苦しそうに見えて、手伝ってやりたくなっても、やっぱりそれはいらんお世話だ」とは、大人になるとき子どもが苦しんでいるように見えて、親は何も手助けできないし、すべきでもない、ということ。

B 傍線部の言葉を言ったときの父の表情や様子から、子どもが成長し自立していくことに対する親の気持ちを考える。「少し微笑んで」「笑顔」で言ったのは、子どもの成長・自立は親にとってうれしいことで、喜びを感じることだから。しかし、「私」に父の笑顔が「なんだかとてもさびしく見え」たのは、子どもの成長・自立は子どもが親からはなれていくこともあるので、そのことにさびしさを感じるからである。

問六 トマトを「息を止めて口の中に放りこんだ」ことや冒頭の二段落から、「私」はトマトが嫌いで、いつもは両親に食べなさいと言われても言うことを聞かず食べようとしなかったことがわかる。だから、トマトを食べることは、父の言いつけを素直に聞くことであり、「父を喜ばせ」ことになるのである。「私」がトマトを食べたのを「少しおどろいた表情で見た後、いつもの微笑を口元にうかべ」たのは、そんな「私」の気持ちに気づき、うれしくなったから。しかし「私」は、「おいしかったかね?」という言葉で、父を喜ばせるために嫌いなトマトを無理に食べたのだということを父に見ぬかれたとわかり、「なんだか恥ずかしい気持ちになった」のである。